慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小室正紀著『草莽の経済思想：江戸時代における市場・「道」・権利』
Sub Title	
Author	仁木, 良和(Niki, Yoshikazu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2000
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.1 (2000. 4) ,p.285- 288
JaLC DOI	10.14991/001.20000401-0285
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20000401-0285

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」93巻1号（2000年4月）

書評

小室正紀　著

『草莽の経済思想
——江戸時代における市場・「道」・権利——』

御茶の水書房，1999年，391頁

1

本書は小室先生の最初の著書であり，おそらくは江戸時代の民間思想家を経済思想という観点から扱った最初の著作といってもよいであろう。そうした意味で，本書はパイオニアとしての積極性の感じられる好著である。以下，書評の形式に倣って本書の内容紹介から始めたい。

2

本書は三部から構成されており，最初に序論があり，最後に補論が置かれる。序論では筆者の研究視角や本書執筆の目的が論じられ，第一部では元禄・享保期に活躍した田中丘隅が，第二部では宝暦・天明期の本居宣長が，第三部では寛政から幕末にかけての水戸学派とそれに連なる人々が，補論では化政・天保期の佐藤信淵が取上げられ，「新たな市場経済の胎動が人々に感じられてきた時期」である享保期から幕末まで江戸時代全体をカバーすることによって，「民間経済思想」史を把握しようとする。従って，各部で扱われるのは個々の人物であるが，全体を見渡せば一貫した通史となっている。では，その全体を貫く筆者の視角とは何か。以下，序論から見ていこう。

序論。筆者は最近の在来産業の研究から「下から」の＝民間経済人の主導性が日本の近代化を支える大きな力になったとし，「民間経済の主導性を主張する思想」を福澤諭吉に代表される啓蒙思想を受容する層に求めていく。筆者はこうした層の人々を民間経済人と規定し，新たな経済社会のメカニズムを経験的・合理的に把握し，さらに為政者の政治的介入がなくても経済的秩序が成り立つことを正当化する論理的能力を備えた人格を民間経済主体という。彼らは，高度な理論を備えた頂点的思想家と異なり，思想的には素人であるが経済や宗教など様々な領域を含めた日常生活を反映した思想（日常性次元の経済思想）を形成することができる。その際彼らは，頂点的思想を一定の傾向をもって換骨奪胎し，利用することで民間主導の経済社会を理論的に正当化する。さらにこの試みは，啓蒙思想を受容する基盤となったし，日本化する力ともなっていく。こうした意味で，近世の民間経済主体の思想を研究することは，近代への移行を民間経済のレベルで捉えていこうとする時に極めて貴重なものとなる。なお，本書では民間経済人の内でも，主に上層農民層が取り上げられる（「草莽の」と題される理由）。

第一部。ここでは川崎宿本陣名主であった田中丘隅を扱う。丘隅の生きた時代は市場経済が著しく進展した時代であり，民間からも独自の農政論や経済論が出る可能性のある時代であった。中でも丘隅は，『民間省要』などの農政書を著わし，市場経済の進展に対しても肯定的な態度をとっていた。従って丘隅の思想に民間における市場経済の正当化の萌芽をみることも可能であるし，市場経済を正当化する場合の思惟様式を捉えることも可能である。彼は金肥の導入や奉公人の賃金などから農家経営の根幹部分が貨幣経済と不可分の関係にある事を認識していたし，彼の経験から市場経済を積極的に容認していた。これは，市場の自律性への信頼に基づくものであり，ひいては市場を構成する民間人の「人情」を肯定すると同時に，そこに一定の経済倫理さえ認めていたためであった。そうであるが故に，為政者の保護や管理は必要でなく，むしろ民間人による自由な経済活動の場が要請される。では，こうした体験的な市場肯

定論をどのように合理的に正当化できるのだろうか。ここに丘隅と徂徠の関係がクローズアップされる。「私欲でこそ人は動く」という丘隅の考え方は，人情を肯定する徂徠学との結びつきを示唆する。実際に人的交流の面では，徂徠門人であった成島道筑と多摩川沿流の豪農グループとの関係があったし，学問的にも人情肯定の側面＝「私的領域」に共鳴し，拡大解釈することで経済論の正当化に利用しようとしたとも考えられる。それを丘隅の俳諧と徂徠学派の詩文派との関係に見ていく。しかし，徂徠派（道筑）の俳諧論は否定的なものであり，丘隅の俳諧の嗜好と結びつかない。だが，俳諧における通俗性や「新しみ」＝新価値の追求は，「一得一失」という不安感を持ちながらも変化を肯定する志向，すなわち市場経済を容認する立場を示していた。こうした丘隅の立場は，徂徠が「私的領域」を制度的枠組みで制約しようとしたものを俳諧の新価値追求によって外してしまう可能性を示唆するものであった。

第二部。ここでは頂点的思想家の本居宣長が扱われる。その理由として，国学に傾倒していった上層農民や商人たちの想いに言葉を与えた人物だからである。従来より宣長については，その保守性が論じられてきたが，本書ではその保守性に再検討が加えられている。史料として『秘本玉くしげ』と『玉くしげ』が取り上げられる。宣長は『玉くしげ』の中で，吉凶善悪は「神の御所為」だとして素直に受け入れることを述べているが，実はこれは単なる保守性を示すのではなく，「為政者の政治的作為の限定」として機能するものだと筆者はいう。これを『秘本玉くしげ』の具体的政策と照らし合わせて考察すると，結局為政者は被支配階級の生活に変化を及ぼすような新しい政策＝新法を行なうべきではないということを示しているのである。例えば，宣長は藤堂藩の一揆の原因は，棄捐令や均田政策のような新法＝作為にあると考え，たとえ仁政によるものであるにせよかえって害をもたらすものだとして否定する。宣長の思想は「天明のレッセ・フェール」の中で論述されるように，為政者は作為をせずに先規を守ることが望ましいのだが，それは決して固定的社会を求めたのではない。むしろ社会を動かしていくのは庶民＝民間人であり，彼らが「家業」＝経済的行為を果すことは「神の御所為」として肯定されているのだという。すなわち，為政者の政治的作為を否定する一方で民間人の営為と行動を肯定し，そこに社会・経済を動かしていく力を見ようとしていたのだという。こうした考え方は，情緒こそ自然であり，「神の御所為」であるとして論理的に展開したもので，丘隅では不十分であったものが宣長において確固とした哲学的基礎が与えられたといえる。

第三部。ここでは後期水戸学とそれに連なる民間思想家が取り上げられる。まず第一章では藤田派農政論を検討する。水戸学は，従来から水戸藩の経済的後進性とからめて封建的秩序再認識の反動的イデオロギーと把握され，その政策である領内総検地も「封建的搾取の安定化」を目的とするものと解されてきた。こうした把握に対して筆者は疑問を呈し，当時の常陸農村の経済構造は後進地域であったことは確かであるにしても，畑方を中心に商品作物生産も見られ，文化期頃から成長の可能性もあり，多様な認識が生み出される可能性を秘めた地域であったという。そうした中で藤田派農政論はどういう意味を持つのかと問い，幽谷の『勧農或問』を取り上げて論述する。幽谷は貨幣経済に伴って生じる侈惰と兼併を重視し，それらについてプラス面よりもマイナス面をより強調し，結果として領内一円総検地という過激な政策を正当化するための根拠としていく。そして，総検地についても，それが仁政であると同時に「非常之御英断」であるが故に「士民の心を得る」ことができるのだと認識していた。こうした認識は，実は農政を通じて上から国民の一体性を作ろうという意図を持ったものだったと筆者はいう。第二章では，反藤田派である立原派の小宮山楓軒と大内正敬を扱う。立原派に共通する認識は，藤田派の総検地とそれに伴う土地税制改革と商業抑

制策への反発である。その理由としては，①農村の状態を改革するより放任しておいたほうが農村経済のためによい　②民間に形成される富は民のものであり，それに軽々に手をつけるべきでない，という観点である。その背後にある考え方は，農民は収益を目指して勤労に励むというものであり，その農政観は「民間における総量としての富の形成と拡大を肯定し，むしろそこに社会安定の基礎を求めようとしたもの」であって，実は「民富論への模索」を正当化しようとするものであった。ところで，この正当化にあたって，楓軒は徂徠学の考証学的側面を受け継いだのに対して，正敬は朱子学的徳治主義を強調するが，それは「政治主体の役割を道徳面に限定し，民間での富の形成の放任を側面援護」したものであって，これも換骨奪胎の一例といえるだろう。第三章では長島尉信を取り上げる。尉信は，天保検地に際して水戸藩に一時登用されている点から藤田派に近いものの，農政論に関しては立原派の影響が強いといえる。尉信は常陸小田村の名主を務め，農業経営のかたわら広範な学問研究を行なっている。筆者は尉信の著作を読み解くことによって，難解な農政思想を明かにした。筆者はまず尉信の石高制を論じる。尉信は古来よりの種々の史料を駆使して，石高は生産量でなく年貢上納の限度額を示すものだとし，石高は生産力の変化に比例して変化するものではないと主張した。さらに「田畑等分の高の限り」という原則を取り入れることで，村ごとの皆済額の上限を示そうとした。こうした主張の背後には，再検地による貢納額の増徴に対する民間の収益権の正当化という問題があった。尉信は，自ら唱えた石高制を正当化するために，その原点である太閤検地を検討する。彼は検地自体には否定的であったのに太閤検地を評価するのは，貫高制下の領主の恣意性を廃し，生産力と連動させることなく年貢の上限を明かにしたことだという。そして，その際大事なことは，石高の決定に際して一揆などの農民の抵抗力を尉信が想定していたことであり，領主に対して「土地所有権獲得の当事者としての近世農民」が歴史における一半の主体性を維持していたことである。つまり，農民の権利を歴史的に正当化しようと図ったものであった。

補論では佐藤信淵を取り上げる。信淵については今まで藩重商主義の内に位置づけ，「上意下達」式の経済論であるとされてきたが，筆者は，信淵の開物論の基礎に農政学や農学が大きな位置を占めていることに注目し，そこから商業論・国家論に発展していく過程を考察する。信淵は関東農村を基盤として，当地方の農村荒廃状況からその救済を国君＝為政者に求めると同時に，「草間の小民」が主体的に生産力の向上に努めるべきことを求めた。まず農政論について。徴税制度は定免制を有利とするが，その際小民救済のための講＝村内の救済組織を提案するなどし，さらに徴税率についての考察も見られるなど「農村内視角」が強く影響している。だが，貢納制度の改革がすぐ行なわれるわけでなく，もっと現実的な対応が必要になる。それが，「技術としての農学」であった。例えば，肥料や商品作物の奨励などあるが，その際販売価格の安定や投下資本の解決を問題とするなど，その目的は技術の改善による生産力の増加＝中小農民家計の安定を目指すものであった。こうした信淵の経世論は，藩重商主義の系譜に立つものというよりは，農家家計安定化のための議論であって，彼の国家論についても農村指導者としての立場に立って農村での実践志向の中から問題を分析し，それに対する独自の制度的対策を模索し，それを一つの「国家モデル」に構築していこうとするものである。

以上簡単な要約から見えてくることは，本書の目的は，経済（市場経済）というものは為政者の管理がなくても民間人の活動の内に機能していくものであるという認識がまず出てくるが，それをどのように合理的に正当化し，経済を自分たちのものにしていくのかということにあったと思う。それについて，筆者が「あとがき」で述べているように，為政者の論理や価値観を越える何か絶対的なもの，すなわち自然と歴史という概念に草莽

の人々は取り組むことによって，現実の支配を相対化し，自らの主体性を正当化していこうとした。こうして彼らは現実の支配から自由になることはできたが，「新たな経済社会の創造を求めて主体的に動いて行こうという姿勢は余り見出せなかった」，つまり経済社会形成への自由の思想としての面は弱かった，というのが筆者の感想でもあり，そこから近代をどのように見据えていくのかというのが課題でもあると思う。

3

最後に幾つかの疑問を提起して評者の責任を果したいと思う。第一に，丘隅の趣味としての俳諧から本書のような結論を導くためには，やはり丘隅の俳諧論が必要と思う。ここでも結局時代の「心性」という言葉に置き換えられているように思われる。第二に，取り上げられた人物が関東に偏っているが，関西との比較――例えば国訴など――をしてみるとどうなのか。第三に，明治期の地方産業の担い手は「田舎紳士」と一般に言われているが，彼らと江戸時代の民間思想とのつながりはどうなのか。担い手としての系譜的なつながりは見出されるのか。第四に，尉信の農業経営はどのようなものであったのか。小作人を抱えていただろうと思われるが，彼らとの関係も興味がある*。

なお，評者の個人的な感想では，第三部・第三章の長島尉信の所と，補論の佐藤信淵の所がとてもおもしろかった。

＊99年10月23日に開催された日本経済思想史研究会（事務局 立教大学経済学部老川研究室）で，筆者に出席していただき本書の合評会を行なった。この疑問のあるものは，名前を省かせてもらったが，その時の出席者が質問したものも含む。また，当日は他にも様々な質問が出て活発な討論がなされ，筆者によってすでに回答されたものもあるが，敢えて取り上げさせていただいた。出席者の方々並びに筆者には勝手ながら御了解を得たい。

仁　木　良　和
（立教大学経済学部非常勤講師）